

## 采女伝説 帝は誰？

◎大和物語(951年成立)・百五十段に初めて采女入水伝説が書かれている。

非常に上品で美しく 男たちが求婚し、殿上人も求婚すれど しなかった

昔、ならの帝につかうまつる采女ありけり。顔かたちいみじうきよらにて、人々よぼひ、殿上人などもよぼひけれど、あはぎりけり。

結婚しなかつた真意はミカドを、すばらしいおかただと、思っていた ミカドがお召しになり、その後お召にならない

そのあはぬ心は、帝をかぎりなくめでたきものになむ思ひたてまつりける。帝召してけり。さて後 又も召さぎりければ、かぎりな

この上なくつらい

く心憂しとおもひけり。

気にかかつて

恋しくもつらくも感じていた

ミカドは一度はお召になったがとくになんとも思わない

夜昼心にかかりておぼえ給ひつつ、恋しくわびしうおぼえ給ひけり。帝は召ししかど、ことともおぼさず。

そうは言っても職務上姿を見せていた もうこのままでは生きていくわけにはいかない

さすがにつねにはみえたてまつる。なほ世に経まじき心ちしければ、夜みそかに猿沢の池に身を投げてけり。

こんなふうには身投げしてもミカドは知らなかった

なにかの機会に知らせを聞いて

非常に気の毒がりなかつて

かく投げつとも帝はえしうしめさぎりけるを、ことこのついでありて人の奏しければ、きこしめしてけり。いといたうあはれがり給ひて、

出かけて

人々に哀悼の歌をおつくらせになった

池のほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌よませ給ふ。

柿本人麿呂、

わぎもこのねくたれ髪を猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき

わが最愛の人の 寝乱れた髪を 猿沢の 池に生える美しい藻かと

思っ  
て見るのが悲しい。

とよめる時に、帝、

猿沢の池もつらしな吾妹子がたまもかつかば水ぞひなまし

猿沢の 池も冷酷だなあ いとしい乙女が池に身を投げて水中の藻をかつ（被）いだ時に、

水が乾けばよかつたのに

そうしてこの池のほとりに墓地を造る

とよみたまひけり。さてこの池には、墓せさせ給ひてなむ

帰らせおはしましけるとなむ。

●柿本人麿呂は持統・文武時代の宮廷詩人である。この歌に応答する帝は奈良朝の天皇であるので、文武天皇が挙げられるが、**病弱で早逝している。この采女伝説は歌謡であり、現実的でないかも知れない。**

◎拾遺集第二十哀傷（1007年）に「わぎもこのねくたれ髪を猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき」が載っている。

また、枕草子（1001年）には清少納言が言っている。

お聞きになつて行幸されたことなどある事こそ大変めでたい話だ。

猿澤の池は、采女の身投げたるをきこしめして、行幸などありけんこそ、いみじうめでたけれ。

柿本人麻呂が詠んだことなどを思うと、言葉では語りつくせない

「ねくたれ髪を」と人丸がよみけん程など思ふに、いふもおろかなり。

●十世紀末葉の宮廷社会では、よく知られた、歌語りとなつていたと考えられる。

『万葉集』中に「人麻呂の歌が364首も載せられているが、「ねくたれ髪」はない。拾遺集にしか乗っていない。また「ねくたれ髪」は平安時代にならないと使われない言葉とされている。

◎七大寺巡礼私記（平安時代後期の巡礼の記録1086年～1192年）大江親道著

猿沢の池。この池は興福寺の南大門の前にある。一般に言い伝えられているには、平城天皇と淳和天皇とが戦つた時、平城天皇の皇后がこの池に身を投げて溺死された。皇后は、従三位伊勢朝臣の子の正四位下勲四等老人（おゆ）の娘であり、高岳親王の母である。伝えられるところでは、桓武天皇には三人の皇子がいた。第一の皇子が平城天皇で、第二の皇子が嵯峨天皇で、この二人は母が同じ兄弟であるが、第二皇子の皇子で淳和天皇となる大伴皇子の母は、贈太政大臣藤原百川の娘である。桓武天皇は将来のために遺言して、へ自分の死後は、初めは長子が即位し、十年経つたら三人で順番に位を譲りあつて、この決まりを乱すことのないようにと申された。そこで三人譲り合った後、長子である平城天皇が即位した。遺戒を守つて十年経たなければならぬところ、（平城天皇は）六年にもならないのに、自分の第三皇子の高岳親王を皇太子にして、位を譲ろうと図つたので、大伴親王は神野親王（嵯峨天皇）に相談を持ちかけた。「平城天皇は先帝の遺戒を乱したからには、もう骨肉の親族ではありません。一緒に攻撃しましょう」神野親王

が答えるには「天子の位を得るのは、人の力の及ぶところではありません。今、平城天皇が遺戒にそむいても、それは自分の徳が薄  
いからで、恨んではいけません」と忠言したが大伴皇子は聞き入れず、叛乱を起こして攻撃した。平城天皇はたちまち 宮廷を脱  
出し、天皇の地位を放棄した。この事件のため、皇后は池に投身して溺死したのだ。平城天皇は悲しまれて御歌を詠まれた。

「ワキモコカ ネクタレカミヲ サルサハノ イケノモクツト ミルソカナシキ（吾妹子が ねくたれ髪を 猿沢の 池のもずくと見るぞ  
悲しき）（私の愛しい人の髪が寝乱れたような有様で、猿沢池の水草のように見えるとは、何と悲しいことか）平城天皇は悲しみに  
耐えず、帝位を辞されると俗世を離れ、仏道に入られてしまわれた。高岳親王もまた皇太子氏の地位を離れて、出家された。その  
法名は真如であり弘法大師のお弟子の真如親王がその人だ。

皇后：・伊勢継子（高岳親王の母）

会津八一 「南京新唱」の中で入水したのは皇后と述べている

●一宮女の投身の伝承が、いろいろに伝えられていたものであろう。ひとつの伝承が歴史上よく知られた事件・人物と結びつけられ、  
事実めかした装いを与えられた異伝を派生していく一例とでも見るべきであろうか

#### ◎古今和歌集

古今和歌 ○二八三（913年～914年）

竜田河もみぢ乱れて流るめり わたらば錦なかやたえなむ

竜田川には紅葉が乱れ散って流れている。この川を渡るならば錦の帯が断たれてしまうだろう。

古今和歌 ○二八四

たつた川 もみぢ葉ながる 神なびの みむろの山に 時雨ふるらし

竜田川に、紅葉の葉が流れていきます。おそらく上流にある、神なびの三室の山では、時雨が降っていることでしょう。

この2首は詠み人知らずとなっておりますが、一説では最初の歌は柿本人麿、後は平城天皇と言われている。

●歌語り<sup>ミ</sup>の世界では、平城帝と人麿呂との結びつきはごく自然なこととしてとらえられてあつたと見てよく、この采女入水の話自体が、異伝派生の過程に置いて理解されるべきなのである。

◎万葉集卷十六櫻児伝説(七世紀後半～八世紀後半)

猿沢の池もつらしな吾妹子がたまもかつかば水ぞひなまし

無耳の池しうらめし吾妹子がまつつかつかば水は瀾れなむ

耳無の池は何と恨めしいことよ。吾妹子がやって来て身を投げたら、水は乾(か)れてほしいものを。

一人の処女が、二人以上の男にいい寄られ、板挟みになって自殺するという話は、卷十六冒頭の桜児の話や「芦屋の菟原処女」、「勝鹿の真間娘子」など『万葉集』中にいくつか見られ、そのほとんどが入水の形をとっている

●猿沢池の歌が無耳池の歌を本にして作りかえられたものと見るならば、采女入水の話そのものも『万葉集』の処女入水伝承とか

かわつていると考えてよさそうである。顔かたちいみじうきよらにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれど、あはぎりけり」という最初の設定もそれを暗示しているといつてよからう。

#### ◎伊勢物語と大和物語

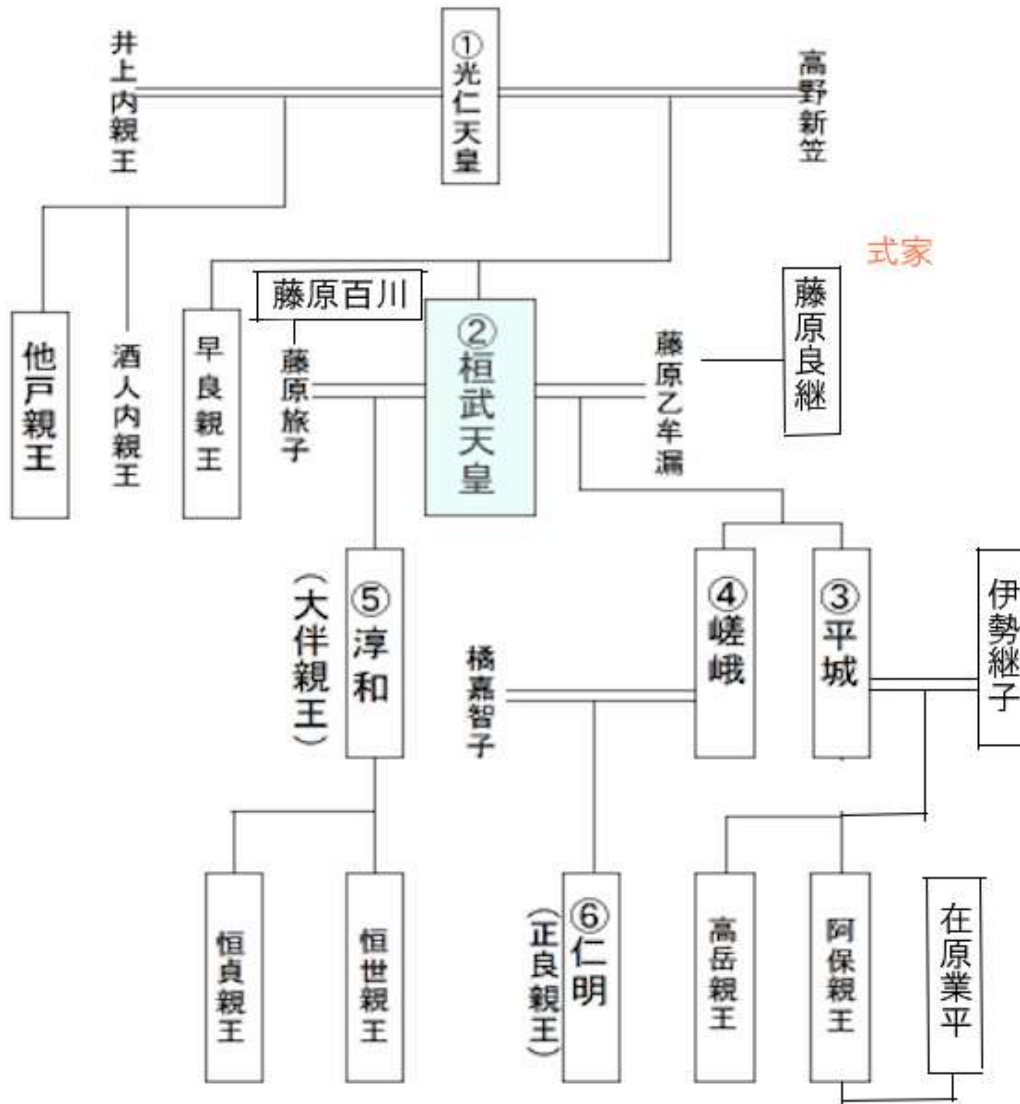
ほぼ同時代に成立した物語であり、話柄や主題の類似する段は多い。その一方で、際立った相違を示すことも少なくない。「伊勢」が在原業平を彷彿させる「男」の一代記的体裁を持つのに対し、「大和」は作品を統括する主人公を持たず、各人物が個有名で語られる。「伊勢」では作品を統括する主人公であった男は、「大和」では歌人の群像の一人として登場する。

●「伊勢物語」は在原業平の一代記であり、「大和物語」にも本人らしき人物が登場する。

在原業平の祖父が平城天皇である。

★以上の検証の結果、帝は誰か?! 明らかである。ヤマト帝は……

# 桓武天皇系図



柿本人麻呂 662~710年  
 文武天皇 682~707年  
 聖武天皇 701~756年  
 平城天皇 774~824年

万葉集 7世紀後半~8世紀後半  
 古今集 913~914年  
 伊勢物語 大和物語より早いが大和物語同時期  
 大和物語 951年頃  
 枕草子 1001年  
 拾遺集 1007年  
 七大巡礼私記 1086~1192年